

新刊
紹介

For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be though expert in both.

手塚竜庵著（校友）「英学史の周辺」東
京・吾妻書房、B 6 版四四一ページ、定価
一、八〇〇円。

著者は、大正十年、同志社大学英文科の
出身。同期の学友には梅花女子大学の片山
春一氏や同志社女子大学の湯浅永年氏、そ
れに今は故人になっているが日本の図書館
界の先輩大佐三四五氏などがある。

著者は同志社卒業後、滋賀・愛知・長野
・東京・京都の各府県の公私立学校の教師
を歴任し、中年、東京都庁に勤務して、同
庁の総務局調査課長、職員研修所教務課長
等を経て、後年、都政史料館々長に栄進し
た。史料館において『東京の英学』『商法
講習所』『東京の女子教育』『東京の大学』

などもっぱら学校史関係の労作をものして
いるが、この間、また日本英学史研究会委
員として英学史研究の分野にも活躍してい
まなお健在の仁である。

本書は著者が既往十数年間東京都の英文
広報誌『トーキョー・ミュージカル・ニユ
ーズ』を初め英学史関係その他の雑誌、学
会等に発表した論攷五十四篇を集めて成し
た図書で、各篇二、三頁ないし四、五頁説
切りの随筆風の短篇で、肩がこらずに気楽
に面白く読める珠玉の作品が集められてい
る。近代日本の開拓に貢献あつた各界の英
米人たちの業績や挿話を中心に、明治初年
草創期の日本人英学の先覚者を織りまぜた
一種の日本英学発表の裏面史とも見られる
興味深い図書である。内容に取り上げられ
ている人物を概観すると考古学者モース、
建築学者ジョサイア・コンダ、科学者ウエ
ストおよびダイヴァーズ、美術家フェノロ
サ、医学イーストレーク父子、行政家チャ
ールズ・ピアード、この他社会事業、土木
事業、外交、スポーツ、教官その他日本の
開化の全面にわたつてその表にあり蔭にあ
つた英米人にスポットをあてて紹介してい

る。

ちなみに論攷の中には同志社関係の記事
も数篇登載されていて

徳富蘆花とその作品の英訳者アーサー・

ロイド

シェイクスピアと同志社

薄倖の詩人・雲峰

新島襄の脱出地

同志社英学校と東京の私学

などがあり、この他標題には出ていないが
諸篇の文中、同志社人や同志社との関係な
ど各所に叙述されていて、一種の同志社側
面史とも言える内容で、特に同志社人として
はひとしお興味深くどこを開いても楽しく
読める図書である。

本書末尾の「あとがき」に、著者は「私
は近く古稀を誕生日をむかえようとしてい
る。そのことでもこの本の出版は私の一生
にひとつの区切りをつけることになり、さ
らに新しい仕事への出発点となってくれる
であろう」と述懐しているが、この意味で
本書は著者の古稀を記念する金字塔でもあ
り、大いに祝福して著者の健康とますます
健筆を折りたいものである。（小野）

重久篤太郎（校友・文学部嘱託講師）著「お雇い外国人―教育・宗教篇」 東京・鹿島研究所出版会、B6判二三七ページ、定価四八〇円。

本書は「お雇い外国人」シリーズ（全十五巻）の内「教育・宗教」部門を取扱い論述したものである。お雇い外国人とは幕末以来日本が欧米の先進諸国から招聘、雇用した人々をいうのであり、外国からの書籍や機械類などの影響より更に生成的な質的にも深い影響を受けたといわねばならない。特に学校の教師すなわち「お雇い教師」と「キリスト教宣教師」とが、人間の内面的方面に感化を与え、日本の近代化における思想的、社会的、宗教的な基盤の形成に寄与したことは見のがすことはできない。本書ではこの点をきわめて実証的な研究成果を基礎として、教育部門で官公立学校の教師であった人々と宗教部門で私雇い宣教師で教育界で最も活躍したプロテスタントの人々を中心に焦点をおいて解明している。著者が長年にわたりこの方面の研究を通して発表されたいくつかの研究論文は、今日高く評価されて来ているが、そのことは本

書を精読すれば、その論述から自然に感じられることと思う。

本書の内容は六項目よりなっており、その前半は、一「夜明け前の外国人教師」でマクドナルドやリギンズについて考察し、二「お雇い教師のはたらき」では、フルベッキ、モルレー、スコット、リーランド、メイソンなどの教育の近代化に特に貢献した人々をまた開成学校、医学校、東京大学文学部の教師ならびにドイツ学の隆盛の箇所でハウスクネヒトやブッセ、ロツツェ、リースなどに言及している。三「プロテスタント宣教師の来日」では、新しいキリスト教の伝来、ヘボン、ブラウンら宣教師の貢献、ゴープル、バラ、タムソン、グリーンなどをキリシタン禁制下の宣教師の活動および日本聖公会の結成を述べ、四「外国人宣教師の教育活動」では、三つのキリスト教主義学校の類型、女子教育に貢献したカロザーズ夫妻、ミス・キダー、同志社女学校、婦人宣教師の献身、立教学院、同志社英学校のキリスト教主義大学の源泉について文献的に解明を進め、宣教師からお雇い教師へ転向した個々の事情について英語学

校との関連で詳述し、更にYMCAの教師についてその影響を述べている。以上の四項目は教育、宗教部門についての概説であり、後半の五「功績のあった人々」と、六「資料」（キリスト教関係の探索報告書）は著者が本書で最も力点をおき、かつ今日までの研究成果を記した箇所とみられ、教示される点が多い。お雇い教師からエドワード・サイル（イギリス）、ルドルフ・レーマン（ドイツ）、レオン・ジュリー（フランス）、宣教師からジョン・トマス・ギユリックとジョン・イング（アメリカ）、ジェームズ・サマーズとヘンリー・フォルズ（イギリス）といったその経歴、業績が広く世に知られていないにもかかわらず地方の教育文化に尽力した七名については特に著者が実証的に研究し、発掘した努力がうかがえるのである。また資料として収録された「雇入米国人の所業探索書」「私学雇外国人教師視察記」「文部省御備外国人明細表」はいずれもはじめて本書で発表された貴重な資料でその意義は非常に大きく、これを基礎としてこの方面の研究を深める上に大いに役立つであろう。

（森）

山田忠男（工学部教授）著「ふるさとの歌」
東京・創思社、18.8×18センチ、一四七ペ
ージ、定価六〇〇円。

同志社大学の山田忠男教授の随筆集「ふるさとの歌」が、今度、東京の創思社より出版されました。随筆くらい、その内容を紹介する事の難しいものではありません。そこでやむをえず彼の人となりについて説明し、彼の本の紹介に代えたいと思います。

彼については、最近、とくに京都府の教育長問題で、文部省を相手に、チャン、チャン、バラバラとわたりあい、その勇名をはせた人であるので、あのロマンス・グレイの紳士を御存知でない方のほうが少ないのではないかと思います。単にマスコミの表面に現れた人柄より、直接彼のそばで毎日接している私から見た彼の人となりの方がより面白く、また真実に近いと思います。

まず、私と山田教授との関係は、山田は親分であって、天野は子分であるかのように一般に思われていますが、事実は全然そのような関係はないのであります。彼は親分なんていう柄ではないのです。それは、彼

が容（ゆる）み棒で、子分の面倒を全然見ないというのではなく、むしろその反対で、極めて金ばなれのよい、そして人の面倒をよく見る性質なのです。したがって親分という素質は充分もっているのであるが、彼自身がそれを望んでいないからなのです。事実、彼が私と話をするときでも、また、私より更に年令の若い小林君や、加藤君と話をするときでも、決して彼は自分が上であるという意識でものを言うようなことはなく、対等の立場で話をするからである。元来、子分というものは親分の言いつけは絶対に聞かなくてはならないもので、すなわち親分、子分という関係は、「上意矢のごとし」という封建時代の主従関係の庶民化したものです。彼は決してそのような関係を自分の生活の場に持ちこむような時代錯誤的な人間ではありません。したがって、私たちの研究室内では、何時でも皆は対等の関係にありながら、彼は彼なりに尊厳をうけているのである。

また、彼はあくまでも詩人であって、私たちのような我利我利の無粋な自然科学者ではないのです。なぜなら、彼ほど美とい

うものに対して徹底的な弱さをもっている人はいないからです。そして、また情にも厚いのである。私たちから見れば、「アホカイナ」といわれるような他人の世話を性こりもなく行なっています。また、その労を全然いとわないのです。随分前の事であるが、私が彼の家で遊んでいた時、学生が息を切って飛びこんで来て、今度の演奏会に練習する曲の総譜がない、だけど「レコード」があるから何んとかしてくれないかと頼みこんで来ました。私は、彼は忙がしいので引きうけなくてもよいのにと思っているのに、彼は徹夜して「レコード」を聞きながら、その総譜を書きあげたりするのです。おおよそ私たちのように、すべてのものに対して合理性を求めているものの中で、彼は不合理性に対しては私たちと同じように憤激するが、私たちの知らない非合理性について非常に強い感覚を持って私たちを導いてくれています。

このような彼が、自己の情のおもむくままに筆をとり、四季にあわせて書いた随筆集は、これで二冊目であるが、これを読むと、彼が何んと楽しい人生を送っていられ

る方であるかと判っていただけたらと思います。以上のように私は多くの方々に、この随筆集をすすめる次第であります。

山田忠男著「ふるさとの歌」は同志社大生協書籍でも販売しております。(天野) 角田豊・小倉襄二(文学部教授)編「現代の社会保障」京都・法律文化社、A5判 三九三ページ、定価九五〇円。

今度、同志社大学文学部社会学科の角田・小倉両教授の編著による「現代の社会保障」が出版された。執筆者は関西の諸大学に奉職している専門的研究者で、同志社大学では両氏のほか、嶋田啓一郎、中條毅、大塚達雄、井垣章二、住谷磐、辻村一郎、三塚武男の諸氏、立命館大学では坂寄俊雄真田是、加藤睦夫、大阪市立大学では小川喜一、宮本憲一の諸氏、その他日本福祉大学の高島進、竜谷大学の桑原昌宏、愛知大学の宮崎鎮雄、大阪社会事業短期大学の堂面秋芳、華頂短期大学の吹田盛徳の諸氏で総員十九名の豪華な陣容である。

その内容は三編から成っており、社会保障の基礎理論 第一章 資本主義と社会保障 (1)総説(坂崎) (2)国民生活における自

助の限界(高島) (3)社会保障における経済と社会(真田) 第二章 社会保障の思想と方法 (1)社会保障の思想(小倉・嶋田・角田) (2)社会保障の方法(小川) (3)社会福祉事業の方法(a大塚・b吹田・c住谷) 日本

本の社会保障 第三章 社会保障の歴史 (1)前史章(小倉) (2)戦後の社会保障(角田) 第四社会保障の体系 (1)社会保険(角田)

(2)公的扶助(小倉) (3)社会手当・社会福祉事業(角田) (4)企業内福利厚生(中條) (5)労務者の自主的福祉活動(辻村) 第五章 社会保障の財政と経済 (1)社会保障の財政論(加藤) (2)社会保障基金と財政投融资(宮本)

(3)社会保障と所得再分配(堂面) 第六章 日本における社会保障の特質 (1)社会保障と生活体系(小倉) (2)社会保障の特質と諸相(小倉) (3)福祉国家状況と社会保障(小倉)

現代社会保障の課題と展望 第七章 社会保障の国際的動向 (1)国際社会保障の動向(嶋田) (2)国際比較(嶋田) 第八章 社会開発の課題 (1)総説(角田・小倉) (2)都市問題と公害(宮本) (3)スラム(三塚) (4)住宅問題(住谷) (5)児童福祉(井垣) 第九章 最低生活の保障 (1)医療保障(小

倉) (2)家族保障(角田) (3)労災保障(桑原) (4)失業保険と雇用対策(宮崎) (5)社会保障と最低賃金制(小川)、最後に日本と世界の社会保障の発達史年表がある。

この書を読んで感ずることは、はしがきで述べられているように、執筆者の理論的立場はことなるが、日本の平和と民主主義を堅持して民生の安定をねがう点では一致しており、また編集にあたり、執筆者の専門的立場を洞察し、理解し、適材を適所に配置された苦心がうかがわれ、それがすべて生きて清新さを与えていることである。

執筆者はいずれも専門家として学界での知名の人であり、これはその集大成とみることもできる。今日、わが国では急激な経済成長の結果社会変動がおこり、工業化・都市化がすすみ、幾多の社会問題を生み深刻化している。平和国家、福祉国家の具体的目標は社会保障の発達にあり、わが国の社会保障の水準が実質的に後退しているから、この書の出現は、生まれるべくして生まれたもので、現代日本の社会保障研究の強力な推進となるであろうことを確信し各位の御一読をすすめた。い。(青井)